

# 信友

信友会事務局  
東京都新宿区本塩町8-2  
住友生命四谷ビル  
電話 080-4816-3202

## 主な記事

- 2面…通信学校長  
通信団長
- 3面…装備部副部長  
陸上自衛隊通信電子の現状
- 4面…中部方面通信群五十周年  
中央野外通信群六十周年
- 5面…会員寄稿

## 五十周年準備委員会発足

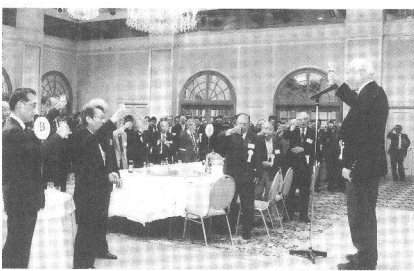
来年の信友会発足五十周年の準備のため委員長に菊池副会長を指名し五十周年準備委員会(委員長以下十七名)を立ち上げました。現在、記念すべき年に信友会全会員による参画・親睦と信友会の益々の発展のため計画的かつ着実に準備を進めています。(六面に続く)

## 第四十八回信友会総会・合同歓送迎会盛大に実施

第四十八回信友会総会・合同歓送迎会(懇親会)は平成二十四年二月十九日(日)、第一ホテル東京において盛大に行われました。十一時から陸幕通信電子課長講話から始まり、十一時二十分からは総会では、平成二十三年事業報告及び平成二十四年度事業計画等が審議了承されました。

その後、十二時から、信友会・現役合同の歓送迎会(懇親会)が挙行されました。

参加者は信友会百二十四名、現役通信科隊員の方々百五十九名の計二百八十三名でありました。現役を代表して通信学校長の祝辞、退官者(信友会入会者)紹介、信友会会長の挨拶及び八十歳以上会員の紹介に始まり、約二時間の会は、信友会員の旧交の場、現役隊員との交流の場として意義深い会となりました。



合同歓送迎会風景

本年は、平成二十五年度二月二十四日(日)に第一ホ



地区懇親会風景

信友会の地方懇親会は、毎年、方面通信群の記念行事祝賀会食の場をお借りして行っています。平成二十四年は、北方方面通信群記念行事に併せて六月三十日(土)に駐屯地隊員食堂において開催されました。今回は信友会創立五十周年記念行事の一環として実施され、北部地区の信友会員の皆様と信友会会長以下信友会役員が参加して、和気あいあいとしたムードの中、旧交を温め、昔話に花が咲いておりました。

## 北方地区懇親会実施

信友会の地方懇親会は、毎年、方面通信群の記念行事祝賀会食の場をお借りして行っています。

平成二十四年は、北方方面通信群記念行事に併せて六月三十日(土)に駐屯地隊員食堂において開催されました。

## 世代交代

会長 行徳 浩志



信友会の会員の皆様におかれましてはお変わりございませんでしょうか。この所東日本大震災、領土問題、経済の長期滞り、首都圏を含む広域の大規模災害発生予言等々、微かに日本の周辺に暗雲が押し寄せ始めたような気がしております。さて昭和三十九年に発足した信友会は今年で四十九年を迎えることが出来ました。そして機関紙「信友」は信友会発足から十五年後(昭和五十四年)に第一号が発行されて三十号を超えました。この間、陸自通信を巡る環境はめまぐるしく変化し、それに応じて通信機材やシステムは世代交代を繰り返して、現在は概ね四・五世代目になるうと

しています。これらの継続と変化は自動的に起きているわけではなく、この間多くの人たちの意志が働いた結果であることは言うまでもありません。信友会を陸自通信のOB会として発足させ、それを皆で四十九年間支えてきた歩みを振り返ってみますと、陸自通信の発展を願って、無から信友会を生み出し、軌道に乗せていただいた会員の皆様と、その後、信友会が軌道に乗った後の運営や変化への対応に力を尽くして来られた会員の皆様に大きく二つに分けることが出来るのではないかと感じております。現職時代に沖縄県で勤務する機会(一九九八年(二〇〇一年)がありました)、当時も信友会の運営を預かったときと同じような感想を持ちました。着任時は革新系の大田知事から、保守系の稲嶺知事に交代する時(一九九八年十月)でした。その当時の自衛隊を取り巻く環境は皆様ご承知のとおり大変厳しいものでありましたが、その中でマスコミや反対派の人たちの攻勢に曝されながらも沖縄県が昭和四十七年に本土復帰して以来、自衛隊を支え続けてきた方々がたくさんおられました。私が着任した時にお会いした人達はそんな方々だったのです。沖縄県もその後、当時お会いした方々の大平

## 49周年総会・合同歓送迎会案内

信友会四十九周年記念の総会及び合同歓送迎会を左記のとおり実施します。

一 日時 平成二十五年二月二十四日(日) 十一時より

二 場所 第一ホテル東京(前年に同じ) 新橋駅から徒歩五分 (JR・銀座線・浅草線)

三 会費 九,〇〇〇円(当日受付にて頂きます)

【お願い】 出欠については同封のはがきでご返信ください。

が引退をされ新しい世代に交代しつつあります。政治も同じように戦後の混乱期に活躍した政治家が日本の戦後を復興させてきました。余談ですが国会議員も世代交代が始まり多くの二世議員になって日本の衰退(?)が始まったように思えてなりません。日本が敗戦の困難を乗り越えて世界に冠たる先進国になった原動力は、戦後間も無い日本社会のいたるところで活躍されていた方々の力ではないかと思っております。このように国家が危機に瀕したような時の日本は、○国民の志の高さ、○貧乏平等、○国家の制度の未熟さ、○強力な抵抗勢力の存在、のような特色があり、当時の日本人は見事に日本を復興させてきました。それらの世代からいろいろのものを引き継いできた我々世代は制度の充実や更なる豊かさを求めてきましたが、今後日本が危機を迎えたときに戦後の復興時の世代のような覚悟があるのだろうか心配になります。信友会も来年で五十周年を迎えますが、戦後間もない混乱期に活躍された諸先輩が立ち上げられた信友会をどのような覚悟を持って後輩に引き継いでいけばよいのかを考えた上で世代交代をしていきたいと思っております。皆様方のご支援をよろしくお願いいたします。

## 「創意と熱意」

### 印象に残るわかりやすい教育

通信学校長 陸将補 小林 英彦



信友会の皆様！通信学校への常日頃からのご支援ご協力、誠にありがとうございます。この紙面をおかりして、まずは心より厚くお礼申し上げます。

時のたつのは早いもので、私が通信学校長に上着して以来、早くも一年近くが経とうとしていますが、通信科の悲願であった野外通信システムの導入も間近ということで、教育準備に余念がないところであります。心配していた教場(建屋)の予算要求や教育内容の確立、教官の育成等も順調に進んでおり、まずは本年の六月から、補正予算で先取りした広帯域多目的無線機の集合教育を開始しようとしており、ところであります。

さて、近年、高度情報・通信技術は著しく進歩・複雑化し、陸上自衛隊にも野外型システムである師団等指揮システム(EOCS)、基幹連隊指揮統制システム(ReCS)、火力戦術指揮統制システム(EOCS)、対空戦術指揮統制システム(ADCS)が整備され、これらをつなぐ伝送路となり野外通信網を構成する前記の野外通信システムが順次導入されて行く予定であります。このため、当校の教育内容も年々高度化・複雑化するとともに教育内容も幅広く増加しているのが実情ではないでしょうか。そこで、これらの装備が導入されることで、学生数は増え、教育内容と教育時間及び教育者も増やさざるを得ず、単純に考えれば通信学校は年々肥大化していつまうはずです。現実に、監察アンケートなどを調べてみても、人員増がないまま年々教育業務が多くなっているというものが、正直なところです。

したがって、当たり前のことですが手抜き教育をしないという前提にたてば、通信学校を肥大化させないためには、いかに教育内容を厳選し、短期間に学生の理解度を高めるため、いかに効果的な教育を行うか、ということがいまだ強く求められる時代であると考えております。

そこで通信学校長の統率方針として「効果的な教育の追求」を掲げ、表題の「創意と熱意」に基づく、印象に残るわかりやすい教育の実施を、学校職員に対し徹底して要望しているところであります。

もうひとつ付け加えますが、ここ数年の通信科BOCの学生を見ておりますが、なんと文系出身の学生の多いことか！文系出身が通信科BOC学生の半数以上を占めている年もありました。

学校長として文系出身者が通信科職種では役立たないとは決して思いませんが、すでに述べたように、年々技術教育が高度化する通信学校としては、正直、ある程度の素養のある理数系の学生がBOCの3/4くらいは占めてほしいと願っているところです。京都大学の文系の学生が分数の四則演算もできないなどという話題が新聞紙面ににぎわしたことがありましたが、やはり通信科幹部の多くは、通信部隊の補職もしくはシステムの維持管理等、通信電子の技術的な専門性を発揮しなければならぬ職務につき、その専門性を磨いて通信のプロとなっていくわけですから、ある程度の理数系の素養は大切で。

ところが、驚くべきことにその理数系出身者ですら一部に基本的な素養がないものが散見され、逆に一部文系出身者に理数系の高い素養をもつものがあるというのは事実です。なにか不思議な感じはしますが、これは通信科幹部になってからの日々の努力の差だと思っております。要は、通信科幹部になったならば、学校教育に頼るばかりでなく、心して自学研鑽に励んでもらいたいということをお願いいたします。

最後に通信科幹部自衛官に次のスクエア問題を出してください。

#### 【単発クイズ ホールドオフ スクエア問題】

太郎君は、行きは時速4kmで家から目的地に行き、帰りはその目的地から時速6kmで家まで帰ってきた。太郎君の行き帰りの通算の平均速度は次のうちどれか？

- ① 4.8 km/h
- ② 5.0 km/h
- ③ 5.2 km/h
- ④ 5.4 km/h

②、③、④などと答えたら重症だといってください。①と答えた通信科幹部自衛官に期待してください。そんな簡単なことばかりにしたり、浪花節で言うのではなく、きちっと計算し答えを出すことが大切なのです。

通信学校長として、より優れた幹部自衛官を育成するため「創意と熱意」を傾注して引き続き校務に邁進していく所存でありますので、今後とも信友会の皆様のご支援、ご協力のほどをよろしくお願い致します。

## 通信雑感：携帯電話と指揮通信

通信団長 陸将補 成田 千春



信友会の皆様には常日頃から温かいご指導・ご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

昨年三月三十日付で通信団長を拝命しました。この四年間方面総監部、師団司令部で、そして昨年春より通信団で勤務、陸上自衛隊における部隊の現状を見て、携帯電話の普及と指揮通信について感じていることを述べてみたいと思います。

今や日常生活において、携帯電話を利用しつつでもどこでも通信ができることが当たり前になっています。自衛隊においても、DICS、衛星通信器材等の導入により、今後は野外通信システム等の整備化により、移動間において、また山岳地域において、どこでも通信ができるようになって、大変便利な時代になってくると思われま。

例えば、日常生活で友人と待ち合わせをする場合、携帯電話がない時代は、待ち合わせの細部位置、遅れた場合の連絡の方法等を事前に調整し、当日も相手が時間通り来るのか不安を持ちながら待っていたものでした。誰もが携帯電話を持っている現在の待ち合わせは、事前に決めるのは時間と駅名等概略の場所だけで、当日待合せ駅に到着した後に携帯電話で駅のどの改札口、どの出口なのか等細部場所を確認し、後から到着する相手の状況を確認しつつ待ち時間を有効に過ごすのが当たり前になっています。

自衛隊においても、例えば搬送通信回線を構成する場合、私が小隊長の頃は、対向する通信所相互に移動・開設にかかる所要時間を見積もり、アンテナ方向・周波数を確認し、電波発射時刻を決めるとともに、不測事態対処の要領等を調整してから出発したものです。また、現地に到着した後も、対向通信所が予定通り到着、開設しているのだろうか、アンテナ方向・周波数は間違っていないのだろうか等、不安を持ちつつ通信所を開設し、電波

発射時間を持っていたものでした。

無線機等通信装備が充実した現在においては、周波数電波発射時刻、概略の通信所位置等最低限の事項を確認して出発し、現地到着後は車両無線機を、ややもすれば私物携帯電話を使いお互いの開設状況等を確かめつつ、電波発射時刻の変更、アンテナ位置・方向の調整等を実施している姿を目にすることがあります。また、移動間においても、お互いに現在の移動地点、道路状況等の連絡をとりつつ走行していることが多いと思います。

確かに、お互いに連絡をとり、確実に通信系を構成することは重要であり、車両無線機、携帯電話等利用できる全ての通信手段を使うことが間違っているとは思いません。しかしながら、もし仮に、車両無線機が無かったら、携帯電話が使用できなかったらどんな状況になるのかを考えたおそろしくなります。実際に、東日本大震災の発生当初に見られるように携帯電話が一時的に途絶、又は通話が困難になる状況も発生しています。また、通信科部隊、特に方面通信群等には自隊通信の為に使用できる無線機の数も限定されており、とても各通信所に持たせるだけの余裕はありません。

陸上自衛隊は「最後の砦」と言われるように、最悪の状況、何もない状況の中においても行動し、結果を出すことを期待されています。東日本大震災において東北方面隊を主体とする自衛隊統合任務部隊が高い評価を受けた背景には、宮城・三陸沖地震対処について平素から詳細な計画が準備され、毎年のように現地訓練が行われていたことがあげられます。その結果、地震発生直後、震災対処計画発動の命令を受けた各部隊は、たとえ通信が通じなくても、準備された計画に基づき、所命の地域に展開し、現場指揮官の状況判断に基づく指揮より応急救援活動を実施出来たのです。その後、通信が確保された以降は統合任務部隊としての組織的・統制のとれた活動が行われたことは言うまでもありません。

携帯電話、スマートフォン等通信機器が発達し、いつでもどこでも通信できる時代においても、時には携帯電話、車両無線機を使用しない訓練を実施し、各級指揮官、小隊長、班(組)長等の指揮・調整能力を練成し、いかなる状況においても確実に任務を遂行できる通信科部隊でありつづけなければいけないと思います。

## 通信電子情報技術と世界観の構築

陸上幕僚監部装備部副部長

陸将補 川瀬 昌俊



信友会の皆様、いかがお過ごしですか。

さて、突然ですが、皆様はこの世をどのようにとらえておられますか。そして、通信電子情報技術に携わった経験は、皆様の世界観にどのような影響を与えておられますか。

昨夏、開発実験団長から陸上幕僚監部装備部副部長に着任して、改めて日々感じているのが職種による認識の違いです。物事の把握の仕方が異なると感じられるのです。それは、大げさに言えば、我々を取り巻く環境をどのような構造として理解しているかに差があるようにも見受けられます。そして、各職種が異なる視点をもち、総合力を如何に発揮しているのか。

では、世界観はどのように成り立っているのでしょうか。我々は、自らが五感を通して経験してきたことを先人のまとめ方を参考にしつつ、見立てているようです。昨今特にソフトウェア分野において「仮想化」と表現している考え方と相通じるものがあるようです。

五感の使い方に職種としての違いはあるのでしょうか。美味しい、肌触りの良い、耳をそばだてる職種、テストハンマーに当たる響きに耳をそばだてる職種、風の読みが生死を分ける職種、そして、電磁波や電子光子の動きについて五感を超越して「感じる」職種、やはり、人間への入力にも偏りがあるようです。

各種の入力をもとに把握するかにしての先人の教えはどうでしょう。

通信電子情報技術を学ぶにあたって、いろいろな数学的取り扱いを教わってきました。「小は大で、大は小」という逆数の関係。周波数と波長の積は定義から「1」であり、アンテナの長さや地形地物の回折度合いの違いとの対応を体感しました。そもそも理屈通りに動く「きれいな波」を生み出す苦労はあまり意識せずに。

桁違いを見やすく圧縮してくれる対数表示。これは、電波伝搬計算において、掛け算すべきところを足し算でできるようにしてくれました。電卓がない時代には今で

は考えられない効果があったことでしょう。

実数と虚数。平面アレイレーダが、位相をずらして並べることで威力を発揮する対砲レーダの技術試験に携わった折には、あたかも虚数が実在するように思えました。

いずれの分野でも、我々が科学技術の凄さを体感できたのは、実は「最適な範囲」においてだったのです。物理学は、理想状態を前提に、数学で世界を一律・連続的に記述することができます。他方、現実においては、物作りや素材の物理的性質などの各種の制約が存在し、数式の適用範囲を限定しています。工学は、その適用範囲の明確化と拡張に挑戦し続けています。いわゆる「境界」や「学際」と呼ばれるグレーゾーンでの戦いです。

こうした数学を背景とし、工学が実現した道具を仲間とともに駆使した体験から形作ってきた世界観は、人間社会の把握にも大きく影響しているのだと思います。

信友会の皆様は、今、どんな分野で深化にあるいは拡張に携わっておられますか。通信電子情報技術を駆使した経験を元に。

二十六歳五十三は、七十九。ある年における期別と年齢の加算結果は(ほぼ)定数です。陸幕も檜町から市ヶ谷へ移転して十二年が経ちました。班長以下の若い人達は、「二本木」時代を体感していません。諸先輩と彼らの構造認識に大きな差はないのかもしれませんが、しかし、構造の各部分についての知識や感覚の比重は違ってきています。当時の担当者は苦労したのに、今では普段意識する必要性が薄れて「ブラックボックス」化しつつある部分については、折に触れて昔話を具体例として語り継ぐ必要性は増えています。他方で、世界各地で諸外国人との職務遂行経験を積んできている彼らの新たな発想も大切にしていかなければなりません。

私は、生物の「進化」を次のように捉えています。時間経過が許容する多様化の中で、偶然を含めた現実の競争の中で生き残った者たちを、ある時点で眺めたものである。であるならば、強いものが必ずしも生き残らないし、柔軟なものが勝ち残るとも限らないのです。多様化の価値をその点においても認めるならば、我々も互いの個性や考え方を含めて多様性を大切に努力をしていきたいと思います。

本年も、信友会の皆様が、それぞれの立場で活躍の上、縦横に連携し、我が国の平和と安全とともに貢献できれば幸いです。よろしく願います。

## 陸上自衛隊通信電子の現況

一 はじめに

防衛省は、平成二十二年十二月に策定された「平成二十三年以降に係る防衛計画の大綱(以下「二大綱」)および「中期防衛力整備計画(平成二十三年度～平成二十七年年度)」(以下「二中期防」)に基づき、動的防衛力の構築に向けた、効果的かつ効率的な防衛力整備を着実に実施しており、通信電子分野においては、科学技術の発展への対応として、高度な指揮通信システムや情報通信ネットワークを整備することにより、確実な指揮命令と迅速な情報共有を確保するとともに、サイバー攻撃対処を統合的に実施する体制を整備しているところである。

特に、近年、情報通信基盤へのサイバー攻撃は高度化・複雑化しており、サイバー空間の安定的利用に対するリスクが新たな課題となりつつあります。防衛省・自衛隊としても、自衛隊の情報システム・通信ネットワークを防護するための機能を引き続き向上させていく必要があり、このため、平成二十五年年度概算要求では、防衛省・自衛隊のサイバー攻撃等対処能力を強化するため、サイバー攻撃等対処を担う中核組織として「サイバー空間防衛隊(仮称)」の新編が要求されました。

また、防衛力が十分に機能を発揮するためには、各種装備品とこれを支える防衛生産・技術基盤などの「物的基盤」の充実・強化が必要であり、二大綱および二中期防において、安定的かつ中長期的な防衛力の維持整備を行うため、防衛生産・技術基盤に関する戦略(以下「戦略」)を策定することが示されており、防衛省では、平成二十四年度に防衛生産・技術基盤研究会が取りまとめ「防衛生産・技術基盤研究会最終報告」※1を踏まえ戦略策定に取り組んでいるところです。

※1 防衛省ホームページアドレス: [http://www.mod.go.jp/approach/agenda/meeting/seisan\\_choutoku\\_houtoku.htm](http://www.mod.go.jp/approach/agenda/meeting/seisan_choutoku_houtoku.htm)に掲載

### 二 主要通信電子器材等の整備

平成二十四年度は、師団通信システム(改)(第三師団、師団等指揮システム(第三師団)、広域域多目的無線機※2(第一師団、第三師団)、対空レーダ装置一号(高射学校)等が逐次部隊に納入されます。

また、平成二十四年度の主要な固定システム関連事業として、方面隊指揮システム(東北方面隊)の換装があります。

さらに、東日本大震災の教訓から、各自衛隊間の現場における接続性の強化、部隊展開後の通信能力の向上等が必要との認識から、野外通信システム(平成二十四年度予算に計上)および広域域多目的無線機(平成二十三年年度補正予算に計上)等を整備し、陸自の駐屯地間の通信網や野外の通信網、さらには民間通信網を利用し、広域・高速のネットワーク環境を中央から最前線の隊員に至るまで提供することができるようになり、現場における情報共有手段の一助になるものと期待されています。

※2 別図「広域域多目的無線機」参照

### 三 体制変換

(一) 陸自部隊の改編  
平成二十四年度の改編部隊として、第四師団及び第十

## 陸幕通信電子課

二旅団が即応近代化改編されます。特に旅団については、改編を通じて火力調整、施設支援、通信支援、特殊武器防護の各機能の強化が図られます。

また、中央即応集団司令部が朝霞から座間へ移駐し、在日米陸軍との連携強化が図られます。

### (二) 陸自通信部隊の改編

第十二旅団の改編に伴い第十二通信中隊が、二等陸佐を指揮官とする第十二通信隊に改編されます。

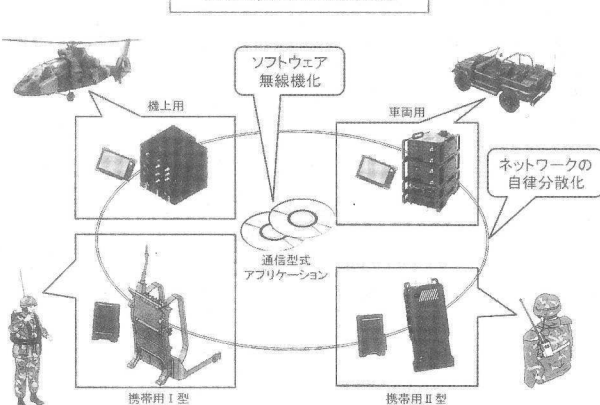
また、中央即応集団司令部の座間への移駐に伴い、東部方面通信群が機能強化されます。

### 四 おわりに

防衛省においては、総合的・横断的な観点から、自衛隊全体にわたる装備、人員、編成、配置などの技術的効率化・合理化を図り、真に必要な機能に資源を選択的に集中して防衛力の構造的な改革を推進すべく、精力的に検討を進めているところです。通信電子課としても、島嶼部を念頭においた統合の機能強化や優れた情報通信技術を利用した、より広範・機動的な情報通信態勢の構築等の検討について引き続き協力するとともに、陸自の野戦ネットワークの核となる「野外交信システム」等の事業を推進し、陸自のC4ISR※3分野の充実発展に日々努力して参る所存です。信友会会員皆様のおかげの一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

※3 C4ISR: Command, Control, Communication, Computer, Intelligence, Surveillance and Reconnaissance(指揮・統制・通信・情報・監視・偵察)の総称

広域域多目的無線機





## 中部方面通信群 創隊五十周年を迎えて

(未来へ繋ぐバトン)

中部方面通信群長 一等陸佐 梅田 将



全国の信友会会員の皆様、日頃から陸自通信充実・発展のためにご尽力頂き誠に感謝しております。今般、「信友」に投稿の機会を得ましたことを大変ありがたく

光栄に思っております。昨年八月に中部方面通信群長を拝命し、約半年が経過しました。中部方面通信群は、昭和三十八年三月に中部方面通信隊として大久保駐屯地で産声を上げ、昭和四十二年三月、中部方面通信群と改称され、今年で創隊して半世紀を迎えます。その節目の年に当たり、現役指揮官として思うところを述べさせていただきます。

中部方面隊は、各方面隊の中で一番広い、全国面積の約三分の一、二府十九県を警備区域とし、その直轄部隊である中部方面通信群は、隷下各部隊を管内の三十五個の駐・分屯地全てに展開しています。

平成七年に発生した阪神・淡路大震災に際しては、創隊以来初となる全陸上自衛隊の通信力を集中運用する任務を遂行しました。震災をきっかけとして、ヘリコプター映像伝送システムが導入され、平成九年には、ロシアタンカーのナホトカ号が日本海において重油流出事故を起こし、編成完結前の仮編成ではありましたが、初めてヘリ映像伝送任務を遂行しました。その後有珠山噴火、中越地震、一昨年の台風十二号被害等、様々な災害における初動を担ってきました。一〇〇〇年に一度といわれる未曾有の災害、東日本大震災においては、全国の通信科部隊と連携し通信群をあげて対応しました。災害派遣だけでなく、カンボディアを皮切りに、ゴラン高原、イラク、ハイチ等の国際派遣任務にも多くの隊員を参加させ、国際関係の安定化に寄与してきました。

また、これまでに通信群は、後方支援体制の変換、基地とシステムの統合、方面隊電子交換システムをはじめとする新装備導入に伴いたび改編されてきました。昨年度末には、方面隊電子交換システム(改)が導入され、運用大隊及び搬送中隊は廃止、新たに指揮所通信大

隊、中枢交換通信中隊が新編され、さらに悲願であった十四旅団管内の基通の中隊化も実現しました。部隊は大きく生まれ変わり、今年度末を目途に戦力化を推進中です。

今日の国際社会は、サイバー戦、大量破壊兵器の移転・拡散、国際テロリズム、地域紛争等、多くの安全保障上の問題に直面しています。我が国周辺地域においては、急速な経済成長を背景として軍事力の近代化・強大化を推進し、尖閣諸島周辺での活動を活発化させ、東シナ海でのガス田開発を強硬に進める中国の存在。大規模な特殊部隊を保持し、核・弾道ミサイル開発を挑発的に続ける北朝鮮、経済の復活を背景に更なる極東地域の近代化を推進するロシアの動向を加えると、同時に三つの問題を抱え、日本の歴史上最も厳しい状況といっても過言ではありません。そのような状況のなか、中部方面隊は、明日にも起こるかもしれない見通もなされている南海トラフ地震の正面にあり、その対処の中核を為すことを期待されています。

中部方面通信群は創隊以来五十年の間に様々な変化を遂げ、多くの任務を遂行してまいりました。それは決して平坦な道ではなく、山あり谷あり、その時代々々を生きた先人・先輩方々の並ならぬ苦勞と努力があったことは言うまでもありません。先人の苦勞と努力は、部隊の歴史と伝統として後輩たちに受け継がれ、今もなおその教えは部隊を育み、部隊の礎をなしています。今を生きる隊員は、先述したとおりの様々な問題から我が国を守り、国民の安心と安全を確保するため、日夜、部隊の精進に励んでいるところであります。いざ出動となったとき、真先に指揮・統制・情報のパイプを構築するのが通信部隊の使命であります。運用の実効性を高めるための研究と出動に備えた練度向上は「これでいい」という妥協があってはなりません。そのためには重要なことは、ノウ・ハウの蓄積・継承だと思えます。所属する隊員は年とともに入れ替わってまいりますが、部隊そのものはこの先も存在し続けます。その部隊を維持発展させていくことは、リレーのバトンのように、先輩から後輩へと永年にわたって受け継がれていく責任なのではないでしょうか。バトンを渡した者は、そのバトンの行方をずっと見守り、バトンを渡された後輩は、その時代の変化に応じ、そのノウ・ハウを充実・発展、適用させて与えられた任務を遂行する。そしてまた後輩へと繋いでいく。何時しかそれは、部隊の歴史と伝統になるのだと考えます。私を含め中部方面通信群隊員一丸となり、任務遂行に邁進し、受け継がれてきた歴史と伝統を未来へ継承していくことを誓います。

## 中央野外通信群 創隊六十周年を迎えて

中央野外通信群長 一等陸佐 白井 一弘



信友会の皆様、こんにちは。

中央野外通信群は、本年度、通信学校と共に創立六十周年を迎えます。通信科と各方面通信群よりなげ中央野外通信群の創立が古いのか? 今回、信友会から寄稿の依頼がありましたので、群本部に保管されている部隊史を紐解き、創立から現在の部隊がどのように出来上がってきたかを調べてみました。群での勤務の長い者に聞いてみました。次第に神話(?)の域に入ってきているようですので、この場をお借りして、ご紹介したいと思います。皆様方の原稿も、中野群が源流かもしれませんよ。

約六十年前、昭和二十七年十一月二十二日、警察予備隊当時、第一四四区隊にそれぞれ個別に配属されていた通信隊を基幹として、「第六五〇通信群」が、新たに長官直轄部隊として編制完了しました。任務は「野戦における長官および直轄部隊間ならびに長官直轄地域の幹線有線通信網の構築・維持・運用」でありました。野戦に、長官直轄部隊、中央野外通信群のスタートでした。通信群は、第六五四通信構成大隊、第六五五通信運用大隊、第六五七通信支援中隊および第六五八通信支援中隊の二〇中隊から構成されていましたが、群本部および運用大隊主力は、豊島(東京、現在田嶋町)に、運用大隊無線中隊は伊丹に、通信構成大隊主力および六五八支援中隊は札幌に、構成大隊一〇中隊は中津六五七支援中隊は福岡と分散配置されたまま、実員は約八六〇名。

その後、通信構成大隊はすべて中津に移駐、通信運用大隊は無線中隊が伊丹から主力のある豊島に移駐しますが、有線中隊が久里浜に移駐し、当初幹部学校のちに通信学校に配属されてしまいました。

昭和二十九年七月、陸上自衛隊が発足し、通信構成大隊、通信運用大隊は、それぞれ第一〇通信構成大隊、第一〇通信運用大隊に、六五七、六五八支援中隊は、それぞれ第三〇二、第三〇三通信支援中隊と改称、群本部および運用大隊主力は久里浜へ移駐し、有線中隊は通信学校の配属を解かれ、支援中隊を除き、久里浜と中津の体制になりました。

飛行班」というのがあります。通信支援中隊に飛行機? ご存じの方は教えてください!

当時の装備は、無線機 SCR-1399、有線搬送装置 JTC-121、無線搬送装置 TRC-13 といった、大部分が供与品の上に数量も十分でなく、教育訓練は大変な苦労です。さらに、処分の記録が! 詳しくは申し上げられませんが、約1年間で、退職、停職、減給処分等が一〇〇件以上、内容も不服従、職務離脱、横領、無許可運転に、官物入質(入)なども。当時の方々のご苦労が忍ばれます。

昭和三十年五月、第三〇二支援中隊は札幌から真駒内に、十月、中津の通信構成大隊が久里浜に移駐し、群本部及び二〇大隊が久里浜に集結。昭和三十一年一月に第三〇一、第三〇二両支援中隊が、北方と西方の指揮下に転移し、第一通信群は久里浜のみとなります。二〇支援中隊がなくなると実員約九〇〇名、これ以後千名を超えることはありませんでした。

昭和三十三年六月、通信群教育所が臨時編成。後の標準隊、電子隊へつながる特別通信隊要員養成であり、群の実員は約九七〇名まで増加。

昭和三十五年一月、通信団に編合、「中央野外通信隊」と改称。部隊構成が変更され、通信運用大隊に有線信務中隊と無線中隊を、通信構成大隊は搬送通信大隊となり、搬送中隊と構成中隊に。

八月には、通信群教育所が臨時特別通信隊として通信学校の隷属となり、群を離れ、実員は約六〇〇名。

昭和四十二年、無線搬送装置(号) JMR-C13、二〇二(JMR-C13)、二〇三(JMTC-1C1)、重無線線(GRC-13)等、国産装備を次々と導入。昭和四十三年三月、「中央野外通信群」に改編され、搬送通信大隊は、二〇重搬送中隊(重搬)、搬送中隊(中搬)、重構成)及び構成中隊(軽搬、連接)という「フル」搬送部隊になり、実員約六八〇名。

これ以降は、まだまだ記憶に新しいですが、昭和五十八年度に東部方面通信群新編にもない運用大隊の一部搬送中隊約二〇〇名が転属、平成十二年度に陸幕の市ヶ谷移転にともない第一〇通信運用大隊が第三〇一通信運用中隊へ、第一〇搬送通信大隊本部管理中隊が本部付隊へと、陸自通信部隊の充実のため、群は少しずつ分離、縮小しながら現在の姿となったのです。

ちなみに、今の群の実員は約三〇〇名(平成二十四年九月末)です。

さて、現在の群は、アナログ器材から二十三年度末更新のIP化された衛星可搬局まで新旧が混在。本来の意味での骨幹通信幹線の構成や合通等、現在のニーズに対応しえ難いのが現実です。しかし現状での最大限の能力を発揮できるよう、特技能力はもちろん、持続走や銃剣道等による気力、体力の向上、更に野外炊事等の継続力を含め、いざという時に備え、今後とも防衛省の野外科幹通信網、陸上最高司令部のための通信組織を担う重責を全うすべく努力しております。

久里浜においでの際は、ちょっと遠いですが、ぜひ中野群まで足を伸ばしていただければ、本造の十号館ともにお出迎えいたします。

では、信友会の益々のご発展をお祈りいたしますとともに、中央野外通信群を今後ともよろしく願っています。

## 愛日と信友会と私

前事務局長 水口 二平



私は平成五年七月六日定年退官、翌日から株式会社愛日に勤務し平成七年十一月社長になり、平成二十四年六月三十日会社解散の日まで約十九年間勤務しました。入社に先立ち社長・会長の面接を受け社名の謂われ(愛日の意味は日時を惜しむこと、或いは惜しんで父母に孝養をつくすことの意味)で「日のあるうちは働く」や愛日と信友会との係わり(事務局を置いている等)をお聞きしその時から信友会を強く意識しました。

愛日は陸自(通信科)出身の矢口弘平氏が昭和四十八年に設立した会社です。社員は陸自と空自の自衛官出身者だけでした。仕事はアンリツ(株)、沖電気工業(株)、松下電器産業(現パナソニックシステムソリューションズジャパン)(株)等の防衛省(本省契約を除く地方機関等)との契約の代行業務です。具体的に各会社から年間委任状を頂き見積書提出、入札書提出(入札参加)、契約締結、物品納入、代金請求・受領及びこの委任事項に関する一切について代行(その手数料で会社運営)することです。仕事の内容とおり自衛隊各機関の実務担当者(主として曹・士或いは初級の事務官・技官)の方と直接対応をして処理する業務です。私は入社後二年間は調達実施本部・海自需給統制本部・空自第一補給処(東京支処)・技本等を担当しました。お蔭で実務を担当しながらも直前まで勤務していた通信補給処を始め後輩の皆様のごとく御用聞きに同様に済みました。この二年間で制服出身の民間企業社員になり切る心構え(官に對してもあるいは民に對しても)が多少は出来たように思います。平成八年からは陸自を担当するようになり元の職場あるいは昔一緒に仕事をした仲間のごとく「毎日」のように通いました。随分迷惑をお掛けしたかと思ひます。しかしいつも親切に対応して頂き感謝しております。親会社から愛日に仕事を任せていただいたことも自衛官出身者の会社ということで官との業務が円滑に進められることが大きな要因であったように思います。現

役との絆こそ愛日存続の根源であったと思ひます。その現役の皆様との絆は信友会に負うところ大です。

信友会と愛日の係わりですが、矢口氏は通信科OB会(信友会)設立に尽力されました。矢口氏は陸幕通信課、通信補給処等に勤務後、昭和三十三年に陸自を退職し日本電波株式会社に再就職したのですが、当時の歴代陸幕通信課長の平岡氏・山本氏・大河原氏の信頼も厚くまた陸自通信科に対する愛着と幹部で初めての退職者との思いもあったよう退職者の少ない時代ではありましたがOB会(信友会)設立を関係者に働きかけたようです。そして昭和三十三年信友会設立後は会社勤務の傍ら一人で昭和五十二年頃まで事務局を運営されました。この間昭和四十八年愛日設立と同時に事務局を愛日に設置、以後愛日解散の直前まで事務局は愛日に置かれていました。私は信友会役員を平成五年から当時の愛日社長林 蔵氏の後の会計幹事、平成十二年からは愛日会長矢口氏の後の事務局長を委嘱され平成二十四年五月三十一日まで約十九年間務めたことになりました。事務局で信友会活動の支援をさせて頂く一方信友会の事業(部隊訪問や部隊での現状・将来施策等の勉強会等)に参加したり、役員の一員として会員の親睦或いは現役との交流の為に信友会として為すべき事業に知恵を絞る汗を流すその活動を通じて現役の皆様との絆を継続できたと思ひます。

信友会役員会は総会で選ばれた会長のもと約二十名の役員で運営されております。役員は毎年新しい退官者から五十六名が会長の委嘱を受け常に新陳代謝が行われています。この役員会で真剣に活動に取り組むのですから他職種の方が羨む通信科OB・現役の強い団結の伝統は引き継がれるでしょう。

信友会事業も世の移り変わりを反映して変化しています。平成十八年の「ホームページ開設」などは大きな飛躍だと思ひます。時代の変化とともに信友会での愛日の役割も終わりの時期が来たのかなと思ひます。

来年は五十周年を迎え記念行事が企画されています。この節目の時期に皆で信友会とその事業についておおいに発案し信友会中興の年になるよう願ひしています。私も五十周年の総会・合同懇親会では大勢の皆様にお会いし「実は・・・」の話を楽しみにしています。

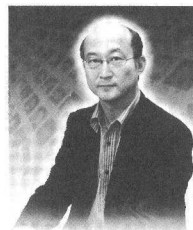
同じ建物(木造民家)、同じ部屋(約六畳)、同じ机(スチール片袖)で同じ仕事をして十九年間過ごしました。今私は心から感謝しています。そして感じたことは「やっぱり商売は難しい」です。

## 最近の

## サイバーセキュリティ事情と私

信友会会員 伊東 寛

(元システム防護隊長)



先輩からOBの活動状況について何か書いてほしいと言われ、私のような若輩者が、とも思いましたが、せっかくの機会ですので私の近況を踏まえ最近のセキュリティ、特にサイバー戦関係の話題等を書かせていただきます。

私は、退職後、外資系セキュリティ会社を経て、現在、ラックという日本のコンピュータセキュリティ会社に勤務しています。

この会社の本業は、言ってみればコンピュータネットワーク上のガードマンみたいな仕事です。宝石店がお客様の宝石を守るために警備会社を雇い、監視カメラを設置しているように、お客様の会社の社内システムを遠隔地からネットワーク越しに監視し、その安全を守る仕事です。そういう会社になりますので、ちょうど一年前に三菱重工さんがサイバー攻撃を受けたという新聞報道が出た際には随分と取材を受けました。あの事件以降、政府もより真面目にサイバーセキュリティに取り組むようになり会社は追い風。株価も上がり、ありがたい風潮にあります。これで給料が上がればもっと良いのですが、仕事が増えて毎日忙しい忙しと言っている割にはまったく上がってはおられませんので、私をどこかで見かけましたら優しくいたってください。

さて、その政府の取り組みですが、そもそも日本政府がサイバー攻撃を受け、官庁などのホームページが書き換えられたのが約十年前になります。それをトリガーとして各省庁にセキュリティに取り組むという動きが活発化し、防衛省ではご案内のシステム防護隊が誕生することになったわけです。これには伊藤豊さんはじめ多くの先人が立ち上げのために汗をかかれたわけですが、ある巡り合わせで私がこの部隊の初代隊長として着任しまし

た。これがきっかけとなり、その後こういう世界の端っこで、というか、ある隙間で、私がサイバー戦の専門家？などと言われるようになったのは、人生、運命の面白さとしが言いたいところですが。

さて、私自身のことに戻りますが、会社では研究所の所長をさせていただいたかわら、ライフワークとなったサイバー戦の研究をやっています。その成果の一部は昨年の二月に詳伝社新書から「第五の戦場 サイバー戦の脅威」という本にまとめ出版されました。これは、私が無い知恵を絞り、うちの家内でもわかるようにとできるだけやさしく書いた本ですので、「サイバー戦」の入門書として広く読んでいただければと思っています。

ここで、サイバー戦ですが、実はその定義が明確にあるわけではありません。

一般的にはサイバー技術を用いた戦争なのでしょうが、そこにはサイバー戦をどうとらえるか、いろいろな切り口と考え方があります。

これは化学戦や電子戦のような特殊な戦闘方式のひとつにすぎないのか、飛行機の発明が空という戦場を生み出した、今では空軍という独立軍種があるまでになっているように、未来はサイバー戦場が生まれ、サイバー軍という独立軍種まで誕生する可能性があるのか。あるいは、もっともっとアクレシブに、戦争というものの概念を変えてしまうものなのか。サイバー戦にはこれから研究すべきことがたくさんありそうです。核時代には核戦略についてたくさんの方が書かれました。ですからこれからサイバー戦略の本もいろいろと書かれることでしょう。核兵器の存在は、熱い核戦争はもちろん通常戦争も抑止しました。しかし、サイバー兵器ならどうでしょうか。まだ研究中ですが、私はおそらくサイバーでは戦争に抑止はかからない、それどころか戦争を誘発してしまうのではないかと思っています。サイバー戦では民間人が勝手に戦争に参加できます。睨みあう二つの軍隊。これらは冷静で抑制されています。しかし、この後の無責任なサイバー大衆はネットで相手を誹謗し相手をサイバー攻撃することでしょう。やがてこの民間人によるサイバー攻撃は物理的な被害を発生させ、熱い戦争開始の引き金を引いてしまうのではないかと。このように思うわけです。毎日、狭くて暑い研究室の机に向かい、講演に出かけ、空いた時間にはこんなことを考えながら日々を過ごしています。△了△

# 信友会五十周年準備委員会発足

準備委員会総括担当 今井 恵治

早いもので信友会五十周年まで一年余となりました。平成二十三年にプロジェクトを立ち上げ、その検討成果として平成二十四年の総会にて「信友会五十周年記念行事(大綱)」のご承認を頂き、四月一日にプロジェクトを改め、準備委員会の発足に至りました。

委員会の構成は、委員長を信友会副会長の菊池伯氏とし、以下、総括係、感謝状贈呈係、記念講演係、記念式典係、祝賀懇談会係、機関誌係、記念誌係、キャンペーン係、地区懇親会係、記録係、会計係の十一個の係、計十七名からなります。

各係それぞれとの連携を取りながら、平成二十六年二月の記念行事を焦点として、委員長指導のもと毎月会議を実施し、その検討結果を信友会役員会において説明・審議して頂き鋭意準備を促進していくところです。メンバーは各種のボランティアを兼務しつつも、その重要性を深く認識して労を厭わず熱のこもった議論を展開しております。

当面の目標は平成二十五年の総会における「実施計画」の審議ですが、並行して地区懇親会を平成二十四年から実施しております。

信友会設立当時から地方会員との懇親は地理的制約もあり課題となっておりますが、先輩方のご苦労や地方会員の方々のご協力を少しでも報いることができると各方面通信群長の協力を頂いて、なごやかに実施しております。

さて、総会において実施計画ご承認後は、ご意見を反映して、平成二十五年四月に「実行委員会」を立ち上げ、実行に向けて更に詳細な準備に着手する予定です。現在のところ準備委員会業務は皆様の絶大なご協力のおかげで順調に進捗しております。

①「会員相互の親睦深化」②「五十周年を迎える喜びの共有」③「会の益々の充実発展を祈念」④「協力者への感謝と変わらぬ協力依頼」の四つの目的を、華美を排し心のこもった満足いく形で達成できるよう頑張りますので、なにとぞ引き続きご協力の程よろしくお願い致します。

なお、これから時期が迫りますと急迫なお願い

を多々致すことがあろうかと思いますが、未熟な後輩の為と思いご容赦いただけますようお願い致します。記念行事の際は皆様こそで明るく元気にお集まり頂き、厳粛ながらも信友会らしい楽しい会となりますよう祈っております。

寒さ厳しき折、くれぐれもご自愛いただきますよう。

## 事務局だより

信友会事務局は平成二十四年度も会長・副会長の指導のもと年間五回の役員会を開催し、総会・合同歓迎会業務を中心に会員の管理業務、機関紙作成等の業務を実施しました。また昨年度は特に、事務局移転対応並びに信友会五十周年対応の臨時役員会を開催しました。五十周年対応では準備プロジェクトから準備委員会に態勢移行し、記念事業内容の深化・具体化を図ってきました。

### 一 信友会総会・合同歓迎会の開催

昨年度の第四十八回信友会総会及び通信科・信友会合同歓迎会では、平成二十四年二月十九日(日)に会員・現役・企業合わせて約二百八十名の参加を得て盛會裡に終了しました。

本年度は、第四十九回総会・合同歓迎会を平成二十五年二月二十四日(日)に、昨年と同じく「第一ホテル東京」において開催する運びとなりました。会員皆様の多数のご参加を心からお待ちしております。

### 二 事務局移転等

昭和四十八年十二月より(株)愛日内で事務局を運営してまいりましたが、平成二十四年六月より住友生命四谷ビル内に移転しました。また事務局長を歴任された矢口弘平、水口二平の両氏には同年五月二十五日、現役の四者会談メンバーから連名の感謝状が贈呈されました。

### 三 五十周年記念事業への対応

五十周年準備委員会は委員長(菊池副会長兼務)のもと検討を重ね、記念事業として、記念行事の開催(平成二十六年二月予定)、信友会の歩み(DVD)の作成・配布、機関紙特集号の発行等の準備を推進しております。

### 四 地区懇親会の開催

会員相互の親睦を目的とした地区懇親会を各方面通信群等のご支援を戴きながら開催しております。昨年度は、平成二十四年六月に北部方面通信群創立記念行事に併せて開催し、会長以下役員を含め多くの会員の皆様が出席して懇親を深めました。

### 五 信友会ホームページ

信友会ホームページを開設して約六年が経過致しまし

た。

今後とも記事の適時の掲載・更新に努めてまいりたいと考えておりますので、益々のご活用をお願い申し上げます。

### 六 通信等事務費納入のお願い

通信等事務費は、毎年の機関紙の発行、三年に一度の名簿の作成・発送等のため、隔年毎に二千元を徴収させて頂いております。未納入の方は、納入戴きたく宜しくお願い申し上げます。

### 七 信友会役員紹介

信友会会長は平成二十三年年度の総会で互選された行徳浩志氏が、平成二十三年四月一日より職を執っております。現在の役員は次のとおりです。\*印 新任

|       |                                                 |
|-------|-------------------------------------------------|
| 【会長】  | 行徳浩志                                            |
| 【副会長】 | 菊池伯・*田中達浩                                       |
| 【相談役】 | *水口二平<br>上水俊哉・佐藤秀守<br>*松岡裕子・*高橋宏彰               |
| 【総務】  | 長 門野睦廣<br>本田徹・田辺利明<br>神喜隆・赤木教<br>*長田寿彦<br>長 山根洋 |
| 【機関紙】 | 石井智・*吉永春雄<br>*白石人士・*桐山正昭                        |
| 【名簿】  | 長 *武藤吉昭<br>児玉忠三郎・小倉良太                           |
| 【会計】  | 長 鮫島茂広<br>宮崎礼二                                  |
| 【監事】  | 長 村田和美<br>角和三部(総務から転任)                          |

ホームページ：<http://shinyukai.fc2web.com>  
Eメール：[shinyukai@tune.ocn.ne.jp](mailto:shinyukai@tune.ocn.ne.jp)

平成24年度信友会会計報告  
(H24.1.1~H24.12.31)

| 収 入         | 支 出       |
|-------------|-----------|
| 前 年 繰 越     | 3,669,620 |
| 終 身 会 費     | 220,000   |
| 通 信 等 事 務 費 | 1,380,200 |
| 利 子         | 152       |
| 第48回総会繰入金等  | 7,342     |
| 以 下 余 白     |           |
| 計           | 5,277,314 |

以上のとおり報告します。

平成24年12月31日

信友会会計幹事

鮫島 茂広

宮崎 礼二

監査の結果、異常ありません。

平成24年12月31日

信友会 監事

角 和三部

村田 和美

計報 謹んでご冥福をお祈り申し上げます  
(H23.12.02~H24.12.01の承知分)

| 氏 名   | 逝去年月日     | 住 所  |
|-------|-----------|------|
| 高橋 義男 | H20.01.12 | 千葉県  |
| 網井 利幸 | H20.02.09 | 福岡県  |
| 河内 孝雄 | H21.10.01 | 北海道  |
| 小阪純一郎 | H22.08.04 | 岡山県  |
| 高橋 春信 | H23.04.15 | 神奈川県 |
| 佐藤 晃  | H23.05.03 | 宮城県  |
| 滝澤 公明 | H23.06.13 | 兵庫県  |
| 西村 文男 | H23.07.21 | 埼玉県  |
| 山田 昭典 | H23.07.21 | 埼玉県  |
| 青木 茂  | H23.10.25 | 埼玉県  |
| 三浦 二朗 | H23.12.09 | 東京都  |
| 岡田 剛  | H23.      | 東京都  |
| 高橋 健一 | H23.      | 北海道  |
| 勝又 恒雄 | H24.01.26 | 埼玉県  |
| 市川 政春 | H24.02.06 | 宮城県  |
| 佐藤 和夫 | H24.02.17 | 埼玉県  |
| 森 繁實  | H24.02.24 | 福岡県  |
| 高倉 重治 | H24.04.16 | 埼玉県  |
| 四宮 一郎 | H24.05.13 | 愛媛県  |
| 渡邊 博  | H24.05.22 | 山梨県  |
| 三宅 忠男 | H24.06.09 | 埼玉県  |
| 重藤 肇  | H24.09.09 | 神奈川県 |
| 黒田 輝彦 | H24.10.13 | 神奈川県 |
| 丹野 泰蔵 | H24.10.18 | 埼玉県  |
| 中村 幸衛 | H24.11.13 | 神奈川県 |
| 松永 信幸 | H24.11.23 | 熊本県  |

## 平成24年叙勲おめでとうございます



|         |         |              |
|---------|---------|--------------|
| 瑞宝小綬章   | 武藤 良孝 氏 | 元情報本部技術官     |
| 瑞宝双光章   | 相田 稔 氏  | 元東北地区補給処通信部長 |
| 危険業務従事者 |         |              |
| 瑞宝単光章   | 佐々木嘉雄 氏 | 元中央基地システム通信隊 |



|         |         |                       |
|---------|---------|-----------------------|
| 瑞宝小綬章   | 福井 孝三 氏 | 元通信補給処長               |
| 瑞宝小綬章   | 古澤 齋志 氏 | 元防衛施設庁建設部通信課長         |
| 瑞宝双光章   | 鈴木 肇 氏  | 元通信学校企画室副室長           |
| 瑞宝双光章   | 杠 誠郎 氏  | 元通信学校第2教育部<br>レーダ教官室長 |
| 危険業務従事者 |         |                       |
| 瑞宝双光章   | 江川 清忠 氏 | 元通信学校                 |

信友会新入会員名簿

(H23.12.02~H24.12.01)

| 氏 名    | 現住所  | 最終所属  | 退職年月日     |
|--------|------|-------|-----------|
| 藤尾 達   | 高知県  | 高地地本  | H18.12.05 |
| 二宮 誠治  | 千葉県  | 通信団本  | H23.03.30 |
| 竹之上 典昭 | 神奈川県 | 防衛大学校 | H23.04.01 |
| 武藤 吉昭  | 埼玉県  | 通信団   | H23.08.01 |
| 齋 憲康   | 北海道  | 北方通群  | H23.09.10 |
| 三木 元秀  | 兵庫県  | 伊丹業務隊 | H23.12.26 |
| 松津 久人  | 神奈川県 | 補給本部  | H24.02.02 |
| 時津 憲彦  | 埼玉県  | 通校    | H24.03.30 |
| 後藤 真理子 | 東京都  | 中基通隊  | H24.03.31 |
| 細谷 智彦  | 千葉県  | 中基通隊  | H24.04.09 |
| 渡部 幸次  | 神奈川県 | 中業支隊  | H24.05.29 |
| 片桐 力   | 北海道  | 11通中  | H24.06.06 |
| 松本 秀史  | 埼玉県  | 補給本部  | H24.06.17 |
| 宮塚 博一  | 福井県  | 福井地本  | H24.07.15 |
| 宮ノ脇 弘之 | 北海道  | 北方通群  | H24.07.18 |
| 林 一也   | 東京都  | 被幕学校  | H24.07.26 |
| 桐山 正昭  | 東京都  | 通信団本  | H24.07.30 |
| 畑中 誠   | 福岡県  | 体育学校  | H24.08.26 |
| 橋 雅敏   | 神奈川県 | 通校    | H24.08.28 |
| 長田 寿彦  | 東京都  | 通信団本  | H24.09.15 |
| 鈴木 勉   | 神奈川県 | 通信団本  | H24.09.23 |